○發明家

岩代國
須賀川　服部貞子

私が以前、郷里から三里ばかり離れた或る田舎町の小學校に奉職して居た頃、野澤といふ家の二階の六疊を借りて自炊して居た。

野澤の家内は、今年から六十にはしが出たといふ主人の藤兵衛に、その家内のお袖といふしやんとした婆さんの二人ぎり。娘は當町で可なりの呉服商に嫁して居て、布哇に出稼ぎに往つて居る倅のところからは毎月の送金がある。それを一文も手をつけずに預けて置いて、二人は二棟の長屋から上る屋賃と、其肥料代で充分に暮して ゆかれるといふ、 至つて内福な家であつた。

極く早起きなお爺さんで、さら〳〵と軒に音ある雪の朝など、目覺めても起るのが辛さに猶仰向けになつて居ると、階下では定つてごほん〳〵と咳入る音して「婆さん〳〵」と呼び起して居る。私が手拭と楊子を持つて降りてゆく頃は、昔の目あかし頭巾を切つて縫つて淺くした茶色の帽子に、子ルの襟巻をスポリとかけて「豪い大雪になりました、はい〳〵」などゝ鐵色の寢ン寢着や前掛に附着いた雪を拂つて居る。井戸端までの道はもう整然とつけられてある。

先入主となつた思想を脱くことが出來ないで、憎いと思つた人は何處までも惡み、はじめ善いと思つた人の爲ることならまた、何でも彼でも善意に解てしまふといふ性質で、すべてが自慢好きな、煽動てられて喜んで居る人の善いお爺さんだつた。

お婆さんはなか〳〵口の八釜しい、併し口ほど腹は惡くない人で、何でもお爺さんの云ふことに反抗て見るのが癖だつたが、それも何處までも然うといふのではなく、大聲にでも怒鳴られると、其まゝもや〳〵と同意してしまふといふ風だつた。

長屋は一棟を五軒に仕切つて、都合十軒になつて居たさうだ。借家人の多くは煙草職人や日雇ひのやうな

其日稼ぎの者で、月末になるとお爺さん自らが催促に出掛けて行く。「皆どうも狡猾くて足を運ばせてばかり居て困る」と口癖のやうに言つて居た。時たま夕暮れになど、青い顔の女が腰をひくゝして入つて來て、上り框に白銅や銅貨の幾何を並べて、何やらくどくどと言ひ譯らしいことを言つて居るのを見たことがあるが、恁んな時にお婆さんはいつも臺所で鍋の音をカチカチさせながら、頻りに物價騰貴の折からを口にして、「……全くさう溜められちや堪んねからない、今一月分入金たところで、あともう二月分も溜つて居るんだぞい、せい〳〵骨折つて入金て貰あなくちやあ仕様ないから……」などゝ小言を云つて居る。縁側にはお爺さんが硯を持ち出して、大きな球の眼鏡をかけて、ひどく筆の先を握つて覺帳に書き入れて居る。

或る日曜の午後だつた。お茶が淹つたからと招ばれて、階下の長火鉢の前で柿餅を燒くお婆さんの手許を見ながら、一寸誉めた鉢の木から、話しは盆栽のことに遷つて、其長いのに困つて居たところへ、格子戸をあけて一人の男が入つて來た。廣い額に一寸くぼみのある目のぎよろりとした男で、薄汚い縞の筒袖の羽織を着て居た。私は直ぐに二階に上つて格別氣にもとめなかつたが、暫く經つてから一寸用があつて降りて來

た時、じろりと私を見た其目が何となく氣味惡るく思はれたつた。言葉の樣子では奧のものらしく、感心して見入つて居るお爺さんの手の、一葉の寫眞を煙管の頭で指し示しながら、稍々せつこみ氣味の調子でこんなことを言つて居た。

「……へえ其處んところが其齒車仕掛けになつて居るのですて、此處からかう葉を入れると、それそこの鉋丁見たいなのがかう落ちて來てそれを刻むやうになつて居るのですな。まだ完全にとはまゐりませんが遠からず……へえ其處が葉の落ちて溜るところ……其齒車のところを今少し、今工夫中なんですがな、當町の田中樣なども大層お賛成下さいますて、お忙しいところをわざ〳〵お光來下さりますたり、なんしても此町から其樣な發明が出るのは殊に名譽だからと仰言つて、他日それが完成の 曉 には是非とも專賣――といふやうに取り計らはうからなどゝ、へえいかいご盡力下さいます。兎も角も世に紹介してやるからと仰言つて、二三日前お知り合の新聞屋さんに賴んで下さりますて、へえ……」

それから暫く經つて男が歸つたあと、階下では何やら大聲で言い爭つて居たが、やがてお爺さんは何處かへ出掛けていつた樣子、間もなくお婆さんが二階へ上つて來た如何したことかと聞いて見ると「何ね貴女、家のお爺さんにも困つちまひやすよ、あんな香具師のいふことなんて本氣にしてるのだら……あれは貴女長家の者なんでつさい、去年の秋から貸しとくのですが、夫婦二人で子供はなし、あらく都合がよくつて貴方、新らしい疊は敷く立派な時計はかざる、一頻りはほんに大臣どんのやうな暮しをして居やしたが、さうして何にも爲ずに贅澤語つて居るうちにすつかり喰つちまつてあとはまたもとの木阿彌でつさ、なんでも何とかの器械を賣る手先を遣つてゝ其代價を着服つちまつたんだなんていふやうな話でしたつけ。すると今度は貴女、桑切る器械を發明するんだつて氣違ひのやうになつて騒いでるんでつさい、お蔭で屋賃はもう二圓幾らつて溜つてるんですぞい、それを家のお爺さんたら宜い氣になつて彼奴の口車に乘つて出來上つたら大したもんだなんて言つてるんですもの、他の者の爲めになりやせんわ！」一息に辯じたてゝさて一寸口を噤んだが、「ねえ貴女、あんな顏してゝ發明なんて出來やせうか？」それでも幾分か、若しやといつたやうな氣持ちでもあるか、「さあ」と行き迫つた私の顏を讀まう

とでもするやうに凝乎と見て居る。したがまた、「よしや出來上つたところで一臺幾何つて大分費るさうなんですから、高が貴女、桑切る器械一つに五兩の十兩のつて出す馬鹿が何處の國のありやすい、ほんに馬鹿馬鹿しい話なんでつさ」とさん〴〵に罵しつて降りて往つた。

それから二月程過ぎたが、二人は時々いつも其事でばかり衝突して居た。同じ長家に長さんといふ、片眼の男が住んで居た。親の代から此處に居て洋傘の張替へを業として居たさうだが、至て世話好きな男で、字も可なりに見えるところから、何かと常に長家中の世話を燒いて、大家の方でも借家人の選擇は長さんに委して置くといふ位、なか〳〵の勢力があつた。此男がまた大へんに隣家の男を憎んで、屋賃を届けに來た折折はよく其讒訴を語つて居た。非常な煙草ずきでお婆さんの置いた長煙管を引きよせながら、「なにゝしても隣家の先生は大金持になりやせう、常に普通なことしてゝは金が殘んねなんて言つてる位だからハヽヽヽヽ子育て桑の柔いやつを、ぎし〳〵器械で揉まれて堪るもんですかい、甘めい油が皆奪れつちまはあね、彼奴夢い見てんだから……」などゝせゝら笑つて居た。

お爺さんはまたそれを、あの男は他の借家人のやうに長さんに首を下げないからだと言つて居た。

月日は用捨なく經つて農家は忙しい養蠶時となつた町役場の旗竿に、天氣豫報の旗が赤や白と毎日取り替へられて、春蠶は二度の眠りを起きたが、桑切り器械はまだ完成しなかつた。

私は其翌月今の學校に轉任となつた。

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本に行を合せるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

初出・底本：「女子文壇」明治四十一年五月一日

テキスト入力：小林　徹

公開：令和六年三月十七日

リンク：「作品年譜」水野仙子ホームページ